

# 戦後日本の学校空間における測定技術の商業化 ——偏差値テストと規律化のメカニズム——

河野 誠 哉

## Prevalence of Hensachi Test among the Japanese Schools and the Mechanism of Discipline

Seiya Kawano

### 1. はじめに

本稿は、戦後日本の学校教育の場面に偏差値テストが深く浸透していった局面に焦点を当てる。ここで議論の足がかりとしたいのは、M・フーコーがその著書『監獄の誕生』のなかで展開していた近代学校文化への視点である。まずはそのことについて、本稿における検討作業の前提となるポイントを押さえておく作業からはじめることにしよう。

周知のとおり、くだんの書物のなかでフーコーが問題提起していたのは、一見したところ自由な主体たちによって構成されているかに見える近代社会のなかに張りめぐらされた、ミクロな権力作用の存在であった。伝統的な権力イメージとは異質のそうした近代的なタイプの権力作用のことを、フーコーは「規律化」という概念でもって定式化しているわけであるが、そこでは近代的な学校組織もまた、そのようなミクロな権力作用が組み込まれた装置のなかでも重要なひとつとして位置づけられていたのだった。

では、その規律化のメカニズムは具体的にどのようなものとして分析されていたか。フーコーの所論からその点をあらためて確認しておく、そうした諸装置の内部で規律的な権力が成功を収めることのできた決め手になったのは、次の3つの単純な道具を活用したこと<sup>1)</sup>にあった。すなわち、①階層秩序的な視線と②規格化をおこなう制裁、そして③その両者の組み合わせたる試験である。

さて、ここに挙げられた3つのなかでも特に要の位置を占めるのは、③の試験をめぐる考察であるといってよいであろう。そしてそこに展開されていたのは、従来の教育研究が暗黙のうちに想定していた試験観とは一線を画するユニークな試験論だったということが出来る。

というのも、ここでいう「試験<sup>エグザミン</sup>」とは、諸個人を分析的なまなざしで捉える「可視化」の実践とでも形容できるような、「診断」や「検査」をも包括する戦略的な概念として使われており、そしてその存在は、通常考えられているような教授行為に伴う副次的な営みとしてではなく、近代的な学校組織にとって、その存立にかかわる本質的な営為として理解されていたからである。

言い換えるならそれは、近代の学校は単なる教授機関ではなく、本質的に絶えざる試験機関でもあるのだという主張であった。そしてそのうえで、この試験こそは決して中立的な営みではなく、まさしく権力的な道具にほかならないという論点が提出されることになるのである。

すなわち、学校をはじめとする規律空間の内部において、そこに収容された諸個人は、この試験という営みをとおして記録文書の対象として位置づけられる。そこにいうならば、記録文書を介した一方的な「見る－見られる」という関係性が設定されるわけであるが、そこで一方的に「見られる」側に置かれたほうの人間は、そこに投げかけられたまなざしを自らのうちに内面化することによって、従順な身体としての自己形成を強いられることになるというのである。

それこそはまさに、かの「一望監視装置」という建築的モデルを使って説得的に示された主体化のメカニズムにほかならないが、その現実の現象形態としてはこのように書記行為を媒介とした事務処理上の営みとして理解されていたことに注意を促しておきたい<sup>2)</sup>。一人ひとりの備えもつ個人性に対して、それを調べあげ、事例化し、記録にとどめること。一見したところ些細なものに映るこうした営みこそが、その当該対象を服従強制の状態に保つための巧妙な仕掛けにほかならず、またそれこそが規律的権力の本質にほかならないというのがフーコーの見解であった。

このようにフーコーの規律的権力論には、その存立の契機たる重要な基礎として「試験」という営みに対する深い洞察があった。そのことをまずは、ここで確認しておくべきポイントの第1として掲げておくことにしたい。

ところで、上記の試験論に関して、いまひとつ指摘しておきたいのは、そこに科学的認識と規律的権力のあいだの深い結びつきについての論及が加えられていたことである。まさしく上述のような試験の方式に伴って、《心・精神》という語幹をもつ人間諸科学がその歴史的発展の歩みを出発させている。学校空間という場面に即していうと、具体的にはそれは、知能検査をはじめとする心理学的測定技術の展開を指すものであるが、これら科学的認識の形成基盤は、個人性に照準をあてる規律的権力の技術論の成立とまさに同根のものだというのである。そして他方ではまた、このような科学的裏付けを伴う測定技術の開発が、規律的権力の道具たる試験の方式をさらに補強する働きを担ったのだとフーコーは述べる。

このように科学的認識と規律的権力とのあいだには、互いにその存立を支えあう親和的な関係性が取り結ばれていた。そのことに対する冷徹な洞察もまた、フーコーの試験論の特徴というべきものであり、そして本稿がこれから展開していく議論にとっても目配りすべき重要な構成要素のひとつである。銘記されるべきポイントの第2として押さえておくことにしたい。

さて、以上に確認してきたようなフーコーの所論を念頭におきながら、この国の学校教育をめぐる状況について考えてみると、なるほどこのような観点からの学校理解は、近代日本の事例に即してみても十分に有効なものであるように思われる。

1872年の「学制」発布による近代的な公教育制度の幕開け以降、全国に建設されたのは、まさしくフーコーが指摘するとおりの、規律的に編制された時間構造と空間配置とをそなえた新しいタイプの学校組織だったわけであり（森 1987、1993、河野 1991）、そしてこの装置の内部では、そこに収容された生徒たちを対象とした体系的な記録文書のシステムが整備されていった歴史過程を、たしかに認めることができる（河野 1995）。

さらにまた、科学との関係性のうえでも同様である。20世紀を迎える頃には、欧米での動向からもほとんど遅滞することなく教育測定運動の成果が取り込まれ、1920年代前後からは数多くの心理学者たちによって知能検査などの科学的な測定技術の研究・開発が進められていく。そ

して実際に学校教育の世界でも、職業指導や入学者選抜といった領域でのこの技術の実用化が模索されはじめたのだった（増田 1952、山下 1982、など）。その意味で1920年代前後というのは、教育をめぐる科学的認識と学校現場とのあいだに最初の本格的な出会いが結び結ばれた時期であった。学校空間における測定技術の「科学化」が意識されるようになっていくのである（河野 2002）。

しかしながら、その後の展開となると果たしてどうだろうか。冷静に振り返ってみると、この国の学校教育をめぐる環境は、すでに久しく以前に、フーコーが想定していたものとは違う設定のもとに置かれていたのではないかという疑問が浮かびあがってくる。というのも前述したような科学的な測定技術は、戦中の空白期をはさんで、戦後、新教育への大きな期待を背景としつつ一時期急速な発展をみたが、その勢いもせいぜいのところ1960年代初頭までのことであって、その後の学校教育の場面においてもそれが教育上の測定技術の花形でありつづけたとはほとんど言い難いからである。

そしてその退潮と入れ替わるようにして学校世界に広く浸透していったのは、主として商業的なコンテクストのもとで実施される偏差値テストという技術形態だった。

もちろんこの両者は、その理念や利用目的等において大きくその性格を異にするものであることはいうまでもない。しかしながら、ここで「測定技術史」という研究視角を設定し、長期的な視野のもとで、ある一定期間その時代相を特徴づける測定技術の変遷過程を跡づけるなら、ここに挙げた2つの局面もまた、同一の台座のうえに並べてみせることのできる一連の歴史過程として措定することができるのではないだろうか。すなわち、知能検査をはじめとする標準検査という測定形態が注目を集めた時代から、やがて偏差値テストが学校教育の現場を席卷していく時代へとという局面の移行。言い換えるなら、測定技術の「科学化の時代」から「商業化の時代」への移行としてである。

要するに、戦後日本の学校状況は、比較的早い時期からすでに、フーコーが想定していたものとはいくぶん異なる設定のうえに置かれてきたことになる。とすると、そうした事態に対して、あらためてフーコー自身の分析枠組みに即した状況把握を試みておくことが必要となってくるにちがいない。上述のような意味での測定技術の「商業化」という局面において、学校空間の規律的基盤にはいったいどのような特徴が刻印されることになったのか。その展望を示すことが本稿の課題である。

## 2. 測定技術の商業化

本格的な検討へと進む前に、ここで測定技術の商業化と呼んだ事態の史的経過について、あらためて概観しておくことにしたい。

しかし、まずは「偏差値テスト」の定義から示しておく必要があるだろう。本稿の関心に即した定義をほどこすなら、それは「進路指導のためのデータ調達を主たる目的として、特定の地域ブロック単位で、複数の学校間をまたいで一斉に実施されるテスト」とでもしておけばよいだろうか。要するにそれは、主として中学校段階では「業者テスト」と呼ばれているものにほかならず、そしてまた大学入試対策のレベルでは、もっぱら「模試」という形式で実施されているものにほかならない。それを、必ずしも一般的でない表現ながら「偏差値テスト」と呼ぶことにしたのは、後述する「標準検査」との対比的関係からしても、測定技術そのもののもつ形態的特質

に準拠した名称のほうが相応しいと判断したことによる。

また、上述の定義からも明らかなおおむね、ここで「偏差値テスト」と銘打ってはいるものの、必ずしもそれは偏差値の利用を第一義とした概念規定ではない。定義上のポイントは「データ調達」という実施目的と「一斉性」という実施形態であって、そうやって実施される測定イベントが大勢として「偏差値」なる成績表示法を伴っていたという、そのシンボリックな意味を汲んで「偏差値テスト」としたまでのことである。したがって、その呼称そのものはあくまで便宜上のものであることを、あらかじめ断っておく。

ともあれその偏差値テストは、おおむね1960年代以降、主として中学校と高校段階において学校教育の現場に深く浸透していくことになった。

わけても、「業者テスト問題」というかたちで社会問題化した経緯があるために、世間的な関心からしても、その浸透ぶりが印象深いのは、とりわけ中学校段階のそれであるだろう<sup>4)</sup>。中学校を市場とする民間のテスト業者は、早いものでは1940年代末にすでに存在していたと言われるが、当時はまだ世間的にはなじみの薄かった「偏差値」という言葉とともに、その存在が最初に広い範囲で社会的な注目を集めたのは、1970年代半ばになってからのことであった。マスコミ報道をきっかけにして、「偏差値」批判、「業者テスト」批判の火の手があがり、国会や地方議会でもその問題性がとりあげられるなどの騒ぎがくりひろげられている。当時の文部省によって、業者テスト利用の実情についての初めての全国調査も実施され、ほとんど全ての都道府県で業者テストが中学校の現場に深く根を下ろしている実態がそこで明らかにされたのだった<sup>5)</sup>。

このとき文部省は、業者テストの利用自粛を求める通達を出しているが、大勢としてはそれ以降も中学校の業者依存の体質が改められたとはほとんど言い難く、それから7年後の83年にも、文部省はあらためて同様の通達を出さざるを得なかった。さらに比較的最近では、92年に偏差値の扱いをめぐる埼玉県教委によって打ち出された行政指導をきっかけにしてこの問題が再燃し、翌93年には中学校の業者テストへの関与そのものを禁止する措置が文部省によってとられるにいたった顛末が、記憶に新しいところであろう。

他方、大学入試対策のレベルでは、いくつかの「模試」業者たちが、早くから「全国区」の市場を争ってきた<sup>6)</sup>。

この業界の老舗といえは旺文社で、早くも1948年には模試事業に着手しており、最盛期の67年には、大学進学希望者の75%に相当する45万人の参加者を集めたとされる（朝日新聞 2000）。また、後発の福武書店（現ベネッセコーポレーション）がこの事業に参入したのは60年代初頭のことで、以後「進研模試」の名称で全国展開し、先行する「旺文社模試」を追い上げて着実にシェアを伸ばし、現在に至っている（福武書店編 1987）。

そのほか、予備校系の模試の存在も重要である。進学指導の強化策を打ち出した一部の予備校が、それまでは在校生を中心に行なってきた模擬試験の事業規模拡大を図るようになり、とりわけ共通一次試験の開始を控えた70年代以降、その全国展開を本格化させるのである<sup>7)</sup>。

これら大学入試対策向けの偏差値テストの場合も、その事業展開のうえで、既存の学校組織とのあいだのネットワークの確保が重要な戦略的要素であったことはまちがいない。会場の設定やデータのやりとりにおいて全国の高等学校とのあいだに緊密な連携関係を結びながら、模試というかたちでの大掛りな学力測定イベントが実施されてきたのだった。

このように偏差値テストは、主として商業的な契機をはらんだテスト業者たちによるセッティングのもとで、すでに久しいあいだ、学校生徒を対象とする測定技術のひとつとして重要な存在

でありつづけたといえる。そしてそれは、かつて心理学者たちによる演出のもとで科学的な測定技術が注目を浴びた時期と、対比的に捉えることのできる時代相であったとみることができるにちがいない。本稿が「測定技術の商業化」と呼んだのは、こうした時代相を指してのことにほかならない。

図式的に整理するなら、表のようになる。

表 測定技術史的観点からみた2つの局面

	科学化の時代	商業化の時代
時 期	1920年代～50年代	1960年代～90年代
演 出 の 担 い 手	心理学者	テスト業者
測 定 技 術 形 式	標準検査	偏差値テスト
代表的な表示形式	知能指数	偏差値

すなわち、かつて測定技術の「科学化の時代」を演出したのが、アカデミズムの世界の住民である心理学者たちであったとすれば、「商業化の時代」の演出の担い手は民間のテスト業者たちであった。また、前者の時代において、具体的に新しい測定技術として注目を浴びたのが、知能検査をはじめとする、一般に「標準検査」と呼ばれる測定形式であったのに対して、後者の時代において学校世界の内部に広く浸透したのは、もっぱら「偏差値テスト」というかたちのそれであった。そして前者の時代に登場した新しい諸概念のなかでも特にシンボリックな存在といえるのが、その表示形式のひとつである「知能指数」であったのに対して、後者の時代においてそれに対応するものは、かの「偏差値」ということになるだろう。

しかしながら、これを歴史的な移行図式として捉えるためには、もう少しばかり補足的な説明が必要だろう。「測定技術の商業化」なる事態の意味するものについて、2点ほど補っておくことにしたい。

第1に、それはたんなる「受験産業の成長」ではない。60年代以降における学校と商業部門とのあいだの、新しい関係性のあり方の形成を意味する出来事だということである。

いうまでもなく、決して60年代よりも以前に、教育関係の事業に着手する商業的組織が存在しなかったわけではなかった。いわゆる「受験産業」そのものは、すでに戦前期から存在していたわけで、たとえば予備校経営や受験雑誌の発行というかたちでの事業展開を、その具体例として挙げることができる。とはいえ、今日の視点から眺めてみると、それらのケースにおいて学校世界とのあいだに取り結ばれていたのは、どこか距離をおいた関係性であったと言わざるを得ないだろう。いわゆる「浪人生」が対象であったり、受験案内や受験ツールの提供であったりと、それらはもっぱら正規の学校システムの「外側」ないし「周縁」での出来事に留まっていたからである。

それに対して戦後の特徴といえるのは、商業部門が学校システムの内部にまで深く入り込んだことにある。学校の内部過程の重要な構成要素である測定技術そのものを、それは「商品」にしてしまったのである。この意味において、学校と商業部門とのあいだには、それまでとはちがう新しい関係性が取り結ばれることになったといえることができる。そしてそれは、かつて1920年代に、学校と科学的領域とのあいだに新しい関係性が形成されていったのと、ちょうど相同的なプロセスとして理解することができるはずである。測定技術における「科学化の時代」と「商業化の時代」とを対比的な移行図式として捉えたのは、まさしくそのためである。

といっても第2に、それは学校空間内部へのたんなる「商業主義の浸透」ではない。その点もまた、あらためて強調しておく必要があるだろう。

というのも、知能検査をはじめとする科学的な測定技術のほうもまた、戦後いちやく商品化の時代を迎えており、とすると「商業化」したのは何も、業者が供給する偏差値テストだけの特徴とは言えない、という反論が考えられるからである。しかしながら、本稿が「測定技術の商業化」という言葉で表現したいのは、もう少し根本的な転換である。

なるほど一方の科学的な測定技術の場合も、戦後、その商品としての流通ルートを確立したとはいっても、そこで商業組織の役割は、測定技術を商品として学校側に供給したという以上の意味をもつものではなかった。このケースにおいては、測定を行ない、データ管理する自律性は、あくまで学校の側に確保されていたからである。

それに対して60年代以降の偏差値テストの学校世界への浸透過程において注目されるのは、測定を企画し、学校生徒に関するデータを解析するエージェントとしての役割を、学校組織の外部の存在である業者自身が担うことになったという事実である。

ここには、学校に対して商業部門によって担われた役割をめぐる本質的な違いが横たわっているというべきである。本稿が注目する偏差値テストの浸透過程は、このように、学校空間そのものの意味的変質をはらんだ重要な局面にほかならないのである<sup>8)</sup>。

### 3. 偏差値テストの認識構造

以上のようにこの国の学校状況は、すでに久しく以前に、フーコーが視野にいれていたものよりも、どうやら新しい局面へと到達していた。規律化の道具たる試験の方式は、フーコーの想定にはなかった商業的なコンテキストのもとで、大きな展開をみていたのである。

では、それがどのように規律空間としての学校の存立機制に関わってくるというのか。次に、このような事態を現出した偏差値テストそのものにそなわる対象認識の構造について検討を加えておくことにしたい。おそらくその部分にこそ、この課題について考えるための重要なヒントが隠されていると考えるからである。

ここでもまた、前述の2つの時代的的局面を対比的に捉える視点は有用だろう。測定技術としての偏差値テストの構造的特質を浮かび上がらせるために、まずは標準検査の作成プロセスについて確認しておくことにしよう。そもそも標準検査とは、いったいどういう測定技術としての特徴をそなえた存在なのか。

標準検査の標準検査たる所以は、その作成過程における「標準化」という作業工程にあると行うことができる<sup>9)</sup>。要するにそれは、当該検査による測定結果を解釈するための尺度規準を設定する作業のことである。設問内容や実施方法などの調査デザインがひととおり確定したところで、その検査対象として想定されている母集団に対して、サンプリングによる予備調査が行なわれ、そこで得られたデータをもとに、完成後の当該検査において測定された素点と、標準得点とのあいだの対応関係が確定されるのである。

知能検査を例にとると、たとえば環年齢が何歳と何ヶ月のばあい、素点が何点だと知能指数いくらに相当するのかという尺度規準が、こうして設定されることになる。この標準化の手続きが適正に行なわれていないと、その検査はまるで信頼のおけないものになってしまうわけで、だからこそ市販の標準検査の広告文には、しばしば「全国的標準のもとに作成」といった品質保証の

文言が添えられることになる。標準検査において、一学級、一学校といったローカルな範囲を超えて、相互に比較可能な測定尺度が提供できるのは、こうした作業工程をふまえてのことなのである。

ところで、一学級、一学校といった狭い範囲を超えた、一般性をもった測定尺度の提供を目的としているというのは、偏差値テストの場合もまったく同じである。主として進路指導のための基礎資料としての活用が想定されている偏差値テストにとって、そこで目標とされているのは、当該学区における受験者一人ひとりの相対的位置づけを確定させることだからである。

そしてまさしくその表示形式上のシymbol的存在が「偏差値」にほかならないわけであるが、しかしながらこの偏差値テストの場合、なかには「標準」の語を冠しているものはあっても、そこに前述のような科学的な意味での「標準化」の作業工程は、ひとかけらも介在していない。ならば偏差値テストにおいて、受験者一人ひとりの相対的位置表示はいったいどうやって可能となるのか。

前述の標準検査における認識過程と対照させるなら、偏差値テストにおけるデータ算出のプロセスは、測定が実施された「事後」に行なわれる。それこそが認識論的な観点からみた場合の、2つの測定技術を分かち決定的な違いである（金井 1960、1961）。周知のとおり、ここでは、いったん学力の測定が行なわれた後になって、受験者全体の平均値や標準偏差が集計されるのであって、またそれをもとに各人の相対的位置が決定されることになるわけである。

ここにとりあげた2つの測定技術は、その背景をなす理念や利用目的における懸隔の大きさゆえに、同一の台座のうえで論じられることは、まずほとんどないと言ってよいであろう。しかしながら、その認識の構造だけを取り出してみると、上述の通り、原理上この両者を隔てるものは、意外に小さな違いにすぎないことがわかる。ある一定の規模をもった集団内での相対的位置づけを表示するというねらいそのものには、じつはそれほど隔たったところではなく、外形的に作業手続きのうえで両者を分かちものといえ、相応の普遍性をもった測定尺度を確定させる作業を、実際の測定に先立って行なうか、それとも測定の事後に行なうかの違いにすぎないのである。したがってその歴史的経過は、事前の標準化をふまえた測定から、事後集計による測定への交代として、理解することが可能であるかもしれない。

しかしそのうえで、測定技術史という観点からすると、このような認識構造の違いのもつ意味はきわめて大きなものであったといわなければならない。それは学校空間における測定の実施形態を、根本的に変えてしまうことになったからである。

というのも、一方の標準検査の場合は、すでにしてサンプル調査をふまえた標準化された尺度をそなえた測定技術であるからには、いつ実施しても基本的には同じ測定結果が得られることになる。各学校の判断で、随時、単独に実施することができるのである。

それに対して偏差値テストの場合とはなると決してそうはいかない。偏差値というかたちでの測定尺度の確定が、実際の測定以後に行なわれるものである以上は、複数の学校が共同で、しかも一斉に実施することが必要となってくる。偏差値テストの大きな特徴であるその一斉性は、上述のような認識過程の転換によって必要となった実施形態でもあったわけである。

#### 4. 新しい認識平面の形成

そしてまさしく、複数の学校に対してそうした設定を提供しえたところに、1960年代以降の

業者テストの飛躍的な拡大の基礎があった。

その現場に立ち会ったひとりである桑田昭三の回顧によると、東京都内の中学校で業者テストが浸透しはじめた1955年ごろ、この時点における業者テストは、もっぱら個別の学校単位で実施されていた<sup>10</sup>。業者の手によって採点まではしてくれるものの、「採点后、返却されてきたものには、個人の得点と校内順位しか出ていない」（多賀 1994、364頁）。つまるところ、この時点でのテスト業者というのは、基本的には「テスト問題提供者」だったわけである。

したがってそこで提供されるテストそのものは、校内テストの代用品でいどの存在にすぎず、そして生徒に対する進路指導は、担当教師たちの長年の経験とカンとを頼りにするほかないという状態にあった。そこにその当時、都内の中学校教師として教壇に立ちながら、進路指導用の測定尺度として偏差値の実用化を模索しつつあった桑田が、出入りのテスト業者に対してデータ処理のノウハウを指導・助言するような関係が生まれてくる。そして桑田は企画部長の肩書きでこの世界に迎えられ、テスト業に専従することになるのである。

ここに引いた桑田の経歴は、直接には「偏差値」誕生の物語として描かれたものであるが、本質的な理解としてはむしろ、測定の実施とデータ処理をめぐる新しい平面の形成過程として捉えるほうが、より適切であるように思われる。偏差値という測定尺度そのものにはおそらく、世間一般で考えられているほどには、それ自体で現実を左右する力はそなわっていないはずで、本質的に重要なのはむしろ、テストの実施形態のほうであると考えられるからである。

実際、業者テストに出会う以前の桑田が試行的に算出していた自校内だけの偏差値は、それだけではとうてい十分な実用性を期待できるような代物ではなかった。個別の中学校ごとに厳然たる学力差が存在しているという現実を前にしたときに、「進学のための資料とするためには、受験生全体の中の、つまり同じ学区内の生徒たちの中での位置を知らなければ、正確なところはわからない。これを比較検討するためには、同じ問題のテストを、それもいっせいにやらなければ意味がない」（桑田 1984、151頁）のである。

そして桑田にとって、さしあたってこうした設定を可能にしてくれる存在が、ほかならぬ業者テストであった。そして中学校教員からテスト業界へと転身した桑田は、それ以降みずからの手で、複数の学校間の一斉テストを組織していくことになるのである。

その意味で、ここに見出すことができるのは、「テスト問題提供業」から「成績データ処理業」へと、テスト業者の性格が変質していく歴史過程であった。そしてこのような経過は、おそらく、何もこの例に限らずテスト業全体に一般的なものだったと思われる。たとえば福武書店の社史もまた、模試事業の展開について同様の沿革を伝えている。同社の「進研模試」の販路を広げるうえで、その展開戦略を方向づける大きな転機となったのは、岡山県における「大安寺模試」に関する経験からであった。

それは、同社の模試（当時は「関西模試」）の採用校でもあった岡山市の新設校・県立岡山大安寺高校が、その第1期生が第3学年を迎えた1965年、新設校ゆえのデータ不足による進路指導上の不利を克服するために、県内の有力高校に呼びかけて、同校作成のテストで合同模試を開くことを提唱し、実現にこぎつけたという出来事である。社史曰く「これがヒントになった。それまで『関西模試』は、採用校が単独で実施するので、成績データが校内における比較に限られたが、地域ブロック等で合同模試として実施すれば、よりニーズの高いデータが提供できることに気づいた」（福武書店編 1987、56頁）。

ここに描かれているものもやはり、たんなる「テスト問題提供業」から「成績データ処理業」



へと、同社の市場戦略が切り替えられていったプロセスにほかならない。言い換えるならそれは、測定の個別の学校ごとの単独実施から、複数の学校間をまたいだ一斉実施への転換であり、また個別の学校単位でのデータ処理から、複数の学校間をまたいだかたちでのそれへの転換であった。

もしもこのような質的な転換がなかったら、テスト業者はおそらく、その後の展開にみられるような特別な存在にはなり得なかったにちがいない。たんなる教材提供者の一部でしかなかったろう。しかしながら、ひとたびこの跳躍を果たしたテスト業界は、そのご急速にその地歩を固めていくことになるのである。

60年代以降の偏差値テストの普及プロセスをきちんと跡づけるためには、そのほかにももちろん、その社会的背景による説明こそは重要であるだろうし、あるいはまたコンピュータの発達に伴うデータ処理能力の拡大というインフラ的要素も欠かせない。けれども、ここでさしあたり確認しておきたかったのは、その認識論的な位相における構造的な発展要因である。偏差値テストは、すでに事前のサンプル調査にもとづく標準化された尺度をそなえた標準検査の場合とは違って、より直截的に、ある集合内部での個々人の相対的な位置を測定しようとするものであるからには、それを主催するエージェントには、いうならば「全数」の捕捉へ向けた強いインセンティブが働く。その意味で、少数のテスト業者の寡占状態のもとに多数の学校が参集するという様相は、偏差値テストという測定技術そのものによって要請された構造上の必然でもあったわけである。

かくして、測定技術をめぐって学校現場と商業部門とに密接な関係が結ばれるという、戦後日本的とでもいえるような新しい局面が生まれることになった。そしてそこに現れた事態は、より大がかりに、一人ひとりの個人に対して一望監視的な視線が行きわたる、新しい認識平面の形成として捉えることができるにちがいない。

ただし、そこに見出される関係構造は、標準検査のもとでのそれとは必ずしも同型のもではなかったことも、あらためて強調しておかねばなるまい。すなわち、かつて標準検査のもとで捕捉される諸個人は、さしあたりそれぞれの所属する学校によって監視される存在にほかならなかった。また、そこで測定技術の提供元である心理学者の存在は、あくまでそうした関係性を背後から支える権威としての役割を担っていたにすぎなかった。

それに対して偏差値テストのもとでは、測定に付される諸個人の個別の学校ごとの所属性は必ずしも重要ではなくなり、ともするとテスト業者自身が、諸個人とのあいだに直接的な関係性をとり結ぶ存在として位置づけられることになる。そして学校生徒が所属する個別の学校よりもより高次の審級へと、まなごしの源泉は高階化されることになるのである。

## 5. 結 び

では前出のフーコーの議論に即して考えてみた場合に、以上のような認識構造・関係構造をそなえた偏差値テストの学校世界への浸透とは、いったいいかなる事態として理解することができるだろうか。ここまでの検討をふまえて、偏差値テスト体制のもとでの学校空間の規律的基盤のあり様について、考察を展開させておくことにしよう。

するとまず指摘できることとして、ここに立ち現れることになったのは、まぎれもなく大掛りな「主体化」のためのシステムであった。そうした側面があることは、やはり、この測定技術にまつわる特徴の第一として、ひとまず認めておかないわけにはいかないであろう。

すなわち、こうした仕掛けのもとで、かつてない多数の人員が、進学予定者＝受験生としての自己を意識させられ、特定の路線へと方向づけられることになったわけで、その意味ではたしかに、こうした事態のうちにフーコーの論じた服従・強制のメカニズムの、いわば発展型とでもいえるような要素を見出すことは決して不当な見解ではあるまい<sup>11)</sup>。

しかしながらその一方で、同時にそこには、フーコーによって提出された理論的モデルをそのまま当てはめることのできないような状況もまた含まれていたように思われる。

というのも、偏差値テストの場合は、前節でみてきたとおり、それを主催するエージェントとしての役割が、テスト業者という学校の外部の存在に委ねられていた。そしてその結果として諸個人を客体化するまなざしの源泉が高階化されるという事態は、個別の学校組織から、規律化のメカニズムの存立基礎が失われる可能性を意味するはずだからである。

もちろん、だからといってただちに、それまで学校が担ってきた地位が、いまやテスト業者によって取って代わられてしまったなどと速断するわけにはいかない。偏差値テストの実際の運用においては、学校が諸個人を捕捉するまなざしの源泉としての地位を装い、測定技術の利用をうまくコントロールしてきたという一面があったことも否定できないからである。私見では、総じて中学校段階にそうした傾向性を指摘できるように思われる。たとえば進路決定のための三者面談の場面で、教師がテスト業者から提供された情報を、説得のための戦略的ツールとして活用するという情景が、実際には展開されていたわけである<sup>12)</sup>。

とはいえそうした状況こそは、その裏面においてむしろ学校の規律的基盤の脆弱性を物語っているというべきではないだろうか。そこで提示される権威が、学校内部で自己調達されたされたものではなく、外部からの借りものにすぎないというのは、教師の専門性の意識にも深く抵触しかねない事態でもあった。実際、現場の教師たちのあいだから、業者から手渡される資料に依存することによってしか満足な「指導」を行なうことができないという自分たちの置かれた立場に対して、違和感や疎外感が吐露されてもいたのである<sup>13)</sup>。

そしてそうした危うさは、学校生徒の側の視点からもまた同様に指摘できるはずである。上述のような状況のもとで、事態の本質を洞察しえた一部の者たちが、その忠誠の対象を自分の所属する学校よりもより上位の審級へと移してくる可能性は常に存在していたわけで、そうやってしまえば学校の規律空間としての緊張関係が弛緩していったとしても決して不思議ではない。そして現実にも、都市部の「進学校」と呼ばれる学校でこそ、そうした傾向は強く現れていたのではないだろうか。

このように、測定技術としての偏差値テストは、その構造上の仕組みからして、一方では、かつてない規模での主体化の媒体として機能しつつ、他方では、規律空間としての学校組織の存立基盤を突き崩しかねない要素を兼ね備えていた<sup>14)</sup>。フーコーの規律的権力論に対する偏差値テスト体制の位置づけは、このような意味で両義的なものを含んでいたというべきではないだろうか<sup>15)</sup>。

#### 〈注〉

- 1) 以下の整理は、Foucault 訳書（1977）第三部にもとづく。
- 2) このようなかたちでの権力作用に対して、フーコーは特に《書記行為にふくまれる権力》という表現を与えている（Foucault 訳書 1977、192頁）。
- 3) 定義からも明らかなおとおり、主に小学校段階で利用されている、いわゆる市販テスト、ワークテスト

の類は、これに含めないものとする。

- 4) 中学校における業者テストの実態については、とりあえず全国進路指導研究会編（1976）、毎日新聞社編（1981）、NHK取材班（1983）を挙げておく。
- 5) 調査報告については、全国進路指導研究会編（1976）が巻末資料としてその全文を掲載している。
- 6) 大学入試対策向けの模試については、マーケティング論の立場からの論稿として、井原・東田（2001）がある。
- 7) たとえば河合塾が模試の全国化を打ち出したのは1972年のこと（河合塾編 1985）。同じく駿台予備学校の場合は、1978年のことである（駿台学園編 1988）。
- 8) 本稿の直接の課題からは逸れることになるが、ここで近年の状況についても言及しておく。90年代半ば以降、高校入試をめぐることは、すでに触れた文部省による業者テストの排除指導がともかくも一応の効果を挙げつつあり、また大学入試対策レベルでは、事実上の無試験による入学が可能な大学が増加したことで、模擬試験による偏差値算出の意味が失われてきつつあるとの指摘もされているところである。さらには2000年には、この分野では老舗の旺文社が模試事業からの撤退を表明しており、以上のような動きから、ここへきて事態は、測定技術の商業化の時代の「終焉」を思わせるような様相を呈しつつあるというのが、とりあえずの筆者の現状認識である。
- 9) 標準検査の開発プロセスにおける具体的な作業工程については、たとえば小見山編（1959）、辰野（1995）を参照のこと。
- 10) 以下、桑田の経歴については、桑田（1984）、多賀（1994）などによる。
- 11) たとえば竹内洋は、日本の「受験生」が置かれた状況を、フーコーの「主体化＝服従化のモデルそのもの」（竹内 1995、110頁）として位置づけている。
- 12) エスノメソドロジ的な手法によって三者面談の場面を分析した研究として、学校社会学研究会編（1983）を挙げておく。
- 13) 前出の注4）に掲げた諸文献を参照のこと。
- 14) さらに付け加えるなら、ここに挙げた2つの測定技術の相違点としては、それぞれをとりまく言説環境の違いもまたおそらく重要である。かつて科学的な測定技術が学校教育の世界に華々しく登場した時期には、たとえば「児童中心主義」とか「個性の尊重」といった言辭がその正当性を支える根拠として繰り返し叫ばれていたが、こうした言説環境が規律空間のコードに親和的なものであったことはいうまでもないだろう。それに対して偏差値テストの場合には、このような「教育的」言説のauraを見出すことは難しい。
- 15) その意味ではおそらく、『監獄の誕生』の邦訳刊行（1977年）を契機として、フーコーの提示する厳格な規律空間としての学校イメージが相応のリアリティをもって受けとめられたというのは、逆説的なことに、学校がそれだけ服従・強制のための装置としての正統性を失いつつあったからこそ起こりえた出来事でもあった。学校の正統性にまったく疑いの余地もないという状況のもとでは、それを相対化する観点をリアルなものとして受けとめる感性は、そもそも成立しえなかったはずだからである。本稿が目指した「測定技術の商業化」という事態は、そうした徴候にかかわる重要な契機のひとつとして位置づけられるのではないだろうか。

#### 〈文献〉

朝日新聞 2000、「旺文社模試今年度限り」『朝日新聞』11月10日付朝刊。

Foucault, M 1975 = 訳書 1977、田村俣訳『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社。

福武書店編 1987、『福武書店 30年史』。

学校社会学研究会編 1983、『受験体制をめぐる意識と行動—現代の学校文化に関する実証的研究—（伊藤忠記念財団調査研究報告書 8）』伊藤忠記念財団。

井原久光・東田晋三 2001、「模擬試験市場における競争戦略—進研模試を事例にして—」『長野大学紀要』

- 第23巻第3号、45-60頁。
- 金井達蔵 1960、「標準学力検査・地方標準学力検査・非標準検査の差・区別—標準学力検査という名のテスト—」『教育評価』第6巻第1号、14-17頁。
- 1961、「テストの標準化ということ」『児童心理』第15巻第7号、85-90頁。
- 河合塾五十年史編纂委員会編 1985、『河合塾五十年史』。
- 河野誠哉 1991、「近代学校の中の『時間』」『青年心理』第90号、154-156頁。
- 1995、「〈表簿の実践〉としての教育評価史試論—明治期小学校における学業成績表形式の変容をめぐって—」『教育社会学研究』第56集、45-64頁。
- 2002、「近代日本の児童研究の系譜における認識論的転換—分析視角の移動とその近代学校論的意味—」『近代教育フォーラム』第11号、175-188頁。
- 小見山栄一編 1959、『教育標準検査ハンドブック』東洋館。
- 桑田昭三 1984、『偏差値の秘密』徳間文庫。
- 毎日新聞社編 1981、『内申書・偏差値の秘密』毎日新聞社。
- 増田幸一 1952、「本邦テスト発達年表試案とその考察」田中寛一博士古稀記念論文集編集委員会編『教育心理の諸問題』日本文化科学社、433-450頁。
- 森重雄 1987、「モダニティとしての教育—批判的教育社会学のためのプリコラージュ—」『東京大学教育学部紀要』第27巻、91-115頁。
- 1993、『モダンのアンスタンス—教育のアルケオロジ—』ハーベスト社。
- NHK取材班 1983、『日本の条件11 教育② 偏差値が日本の未来を支配する』日本放送出版協会。
- 駿河台学園七十年史編纂委員会編 1988、『駿河台学園七十年史』。
- 多賀幹子 1994、「『ミスター偏差値』と呼ばれた男」『文芸春秋』第72巻第13号、362-367頁。
- 竹内洋 1995、「受験と選抜」『日本のメリトクラシー—構造と心性—』東京大学出版会。
- 辰野千壽 1995、『新しい知能観に立った知能検査基本ハンドブック』図書文化社。
- 山下恒男 1982、『日本の教育心理学—その役割と思想を問い直す—』明治図書。
- 全国進路指導研究会編 1976、『偏差値』民衆社。